心肺蘇生法に神様は必要か？　ヘルメス編

「さて、それじゃ説明してもらおうか」

　ヘルメスが瞬の学校に来た、その日の放課後。家に帰るなり、瞬はフローリングの床に正座させたヘルメスと妖精モドキに冷ややかな視線で見下ろした。

　ただでさえ編入生が来て騒がしいのに、その上ヘルメスが瞬と知り合いらしいということでクラスメイトに――果ては他のクラスの連中にまで――付きまとわれて、瞬のイライラもピークに達していたのだ。

「しゅーん、足痛いんだけど」

「黙れ。そして説明しろ」

「しびれますぅ……」

「妖精モドキ。そう言いながら、実はちょっと羽で浮いてんだろ」

「何故分かったんですかっ？」

　羽をパタパタ動かしておいて、隠しているつもりだったのか……と、少し舐められた気分になり、瞬はギロリと妖精モドキを睨んだ。

　このまま妖精モドキに構っていたら日が暮れるので、瞬は視線をヘルメスに戻し、質問を続けた。

「取りあえず、俺の学校に編入してきた理由を聞こうか。後、どうやって編入したのかも、な」

　編入するには色々と書類を用意したり、他にも手続きが必要だ。この短期間でどうこうできるとは思えない。勿論、瞬はどうこうした覚えは欠片もないので、妖精モドキかヘルメスのどちらかが何かやったのは明白だった。

　瞬の問いに、ヘルメスは「うーん」と言いながら考え込むような顔をする。

「……なるほど、手を引いているのは妖精モドキ。貴様か」

「え、いやー」

　わざとらしく目を逸らす妖精モドキだが、このまま誤魔化せるつもりは瞬にもない。きっちり説明してもらいたかった。

「あのな、妖精モドキ。俺はヘルメスが学校に編入してきたことに怒っているんじゃないんだ。その理由が分かんないから怒っているんだよ。なんかあるんだろう？　ヘルメスを編入させる必要がさ。それをとっとと吐けっつってんの」

　瞬からすれば、ヘルメスを学校に編入させることは理解不能だった。何故ならば、

「だいたいさ、ヘルメスがいるなら、お前と二人で他の神様を探せばいいんじゃないのか？　言っとくけど、学校ってそんな暇なところじゃないいんだ。俺とヘルメスが学校に通っていたら、そりゃ時間の無駄だろう？」

　このことについては、実は瞬もどうしようかと考えていたことだった。瞬はまだ学生。平日は学校に行かないわけにもいかない。だがそうなると、妖精モドキは一人で他の神様を探す必要があり、それはとても非効率的なことだ。この小さな体では、隣町に行くにも一苦労である。

　必然、瞬が学校に行っている間は妖精モドキは何もすることが無く、捜索する時間が出来るのは土日祝日くらいだろう。瞬が学校を休む手もあるが、そう何度も使えない。

　だから、ヘルメスが来た時、その点は何とかなったと内心ホッとしていたのだが……ヘルメスが編入してきたせいで、それもパァになってしまった。

「うー、分かりました……」

　観念したようで、妖精モドキは話し始める。

「ヘルメス様を瞬様の学校に編入させたのは、簡潔に言えば瞬様の『護衛』にするためです」

「俺の護衛？」

「ええ。クレイオスがいつまた襲ってくるか分かりませんし……クレイオスより厄介なやつが来ないとも限りません。瞬様の中に最後の神様がいらっしゃること、それに私達がヘルメス様を取り戻したことは、クレイオスを通して敵側に筒抜けになってしまったでしょうから」

「…………」

　それを聞いて、瞬は黙る。

　確かに、自分の中にやつらが探していた最後の神がいる。だから、それを狙って襲ってくるということは、瞬にも十分予想できていた。

　予想できた上で、ヘルメスには他の神を探しに行って欲しい。そう思っているのだ。

　と、いうのも、仮に昨日のクレイオスのようなやつが襲ってきたとしても、瞬自体は何も出来ないわけじゃない。簡潔に言えば、自分の心臓を止めさえすれば、後は中の神様が何とかしてくれるから。

　それは、ヘルメス達と一緒に行動していても同じこと。流石にヘルメスにだけ戦わせておいて、自分は脇で見ている、というのは、瞬も男としていかがなものか、と思うわけで、結局は自分の心臓を止めるためにあらゆる手段をつくすだろう。無論、瞬自身も積極的には心臓を止めたいとは思っていないのだが。

　だが、よくよく考えてみると、それは少し無謀なのではないか、と瞬は思った。

　瞬の中の神様が戦えるのは、長くて五分。これまでの戦闘は、瞬が目覚めると既に終わっていたし、後遺症も今のところ何も無い。だから、きっと二、三分程度で敵を倒していたのだろう。それが分かっているから、瞬も中の神様に全部任せても大丈夫だと思っていた。

　だが、もしも敵が複数で襲ってきたら。昨日のクレイオスより遥かに強い敵が現れたら。果たして瞬の中の神は、五分以内でそいつを倒しきれるだろうか。

　きっと答えはノーだろう。倒しきれなかったことが、瞬の脳裏を過ぎり、少し身震いする。もしも倒しきれなかったらどうなるのか、あまり考えたくは無かった。

「……分かった。ヘルメスを護衛につけるために、俺の学校に編入させた理由については納得したよ。そこについては、よろしくお願いします」

　瞬はヘルメスに向かって頭を下げる。少しヘルメスが驚いたような声と仕草があったような気がしたが、瞬は気にしない。

「じゃあ次に、どうやって編入したかを聞こうか。手続きはどうした？」

「ああ、そこはまあ、適当に」

「後で詳しく聞いてやる」

　妖精モドキが視線が揺れたところを見ると、色々と問題ありそうな手段を使ったような雰囲気があったので、瞬は後に回す。取りあえず、何かしらおしおきは必要になりそうだった。

「なら、三つ目の質問だ」

　妖精モドキから視線をはずし、瞬は今度はヘルメスの方を見た。

「えーっと、答える前に、足崩していい？」

「……いいだろう」

　どうやら、足がそろそろ限界だったらしい。割と辛そうな表情で頼み込むヘルメスに、やれやれという感じで瞬は許可を出した。

「ヘルメス。お前のことを教えてもらおうか」

　何故女の子なのかってところを特にな、と瞬は心の中でそう付け加えた。